

第2号 熊本市後藤是山記念館だより

居 成 淡

ノーベル文学賞作家である川端

康成の小説「波千鳥(なみちどり)」には与謝野寛、晶子の歌とともに後藤是山の歌が5首登場しています。

是山の歌は、「波千鳥」の中で文子という若い女性が、まだ訪れたことのない父の郷里である大分県竹田を旅する時、そこがどのようなところか惹きつけられることとなった歌として出てきます。そしてこの歌を詠んだ人物として実名こそ出てきま

せんが、是山が「久住町(くじゅうまち)

川端文学に登場する是山

の人」となって、文子の父が子供のころ知っていた人として登場するのです。

「波千鳥」に出てくる是山の歌

は、

ふるさとの山の心のやさしさの

流れ出でたる水の音かな

はて知らず空に続ける野の色も

幼き日より我を染めけん

など、心に沁みわたるような歌、

5首です。これらの歌は、寛と晶子が昭和6年と7年に来熊した折、

有名な「肥後清遊」の時になりま

すが、是山が工藤久泉(くどうきゆうせん・歌人・後の久住町長)

らとともに二人を竹田の町や久住

の山々を案内した時に詠んだ歌で

す。久泉は、寛と晶子のこの「肥

後清遊」を記念し、二人の詠んだ

歌とともに自分たちの歌をまとめ、

昭和8年、歌集『久住山の歌』と

して九州山岳会から出版します。

「波千鳥」は昭和28年から29年

に発表されたもので、この歌集は

川端によって出版20年後に小説

の中で取り上げられたことになり

ます。

是山は晩年になると俳人として

の活動が活発になりますが、もと

もと歌人としても著名で、寛と晶

子が主宰する新詩社の『明星』同

人としても活躍しています。寛を

して「是山君は才子です。いい素

質を持っています」と言わしめる

ほどでした。

寛と晶子の2回にわたる「肥後

清遊」は、2回ともあいにく雨霧

が深く、とうとう久住山の全貌を

見ることは叶いませんでした。が、

歌集『久住山の歌』の中の歌を読

むと、この時の感動が今でもみず

みずしく伝わって来ます。

久住を訪れた時の寛と晶子の歌

の中には次のものがあります。

大いなる師と近づくに似たるかな

久住の山にひかるる心(寛)

久住山阿蘇のさかひをする谷の

外は襷さえ無き裾野かな(晶子)

この二つの歌を含め、久住山を

見渡す飯田(はんだ)高原には、

二人の歌碑が建立されています。

また、川端康成も「波千鳥」執

筆のため、昭和27年、28年に九

重高原を訪れています。「波千鳥」

は取材ノートの紛失によって残念

ながら完結しませんでした。こ

の小説の舞台となった飯田高原に

は、昭和49年7月に『川端康成文

学碑』が建立されており、高原が

美しく描かれた小説の一節が刻ま

れています。

〈参考文献〉

久住山の歌 九州山岳会発行

『千羽鶴』川端康成著 新潮文庫

後藤是山入門(その2)



〈九州日日新聞社退社から亡くなるまで〉

世を嘆く一老記者でありたい

是山入門(その1)では、後藤是山(本名・後藤祐太郎)の生い立ちから昭和9年(1934年)、九州日日新聞社(以下、「九日」という。)を退社する48歳までを辿りました。今回の(その2)は、その後の生涯をたどります。

◆新しい道を見つけるため上京

昭和9年、九日の監督であり是山の良き理解者であった山田珠一が亡くなると、是山は当時の九日社長から言われます。

「ああなたにはやめてもらわねばならん」

「わかりました。やめまっしょ」

売り言葉に買い言葉。文化、文芸面を重んじる是山の考え方と政党機関紙の性格を強めようとする

考え方の対立でした。是山は九日を退社後すぐに上京します。これから自分にできる新しいものを探すための旅でもありました。東京では、清浦圭吾、安達謙蔵、徳富蘇峰、与謝野寛、晶子、堅山南風などに会います。皆が是山の今後を心配し、是山を応援します。

蘇峰は「東京でも仕事はある。しかし、あなたには熊本でまだまだやってもらわなければならん」とがある」と是山に語りました。是山はその言葉で、熊本に残り言論を深め、文化の発展に尽くすことを決心するのです。

◆生涯一記者としての出発

月刊誌『東火』と

旬刊誌『西海時論』の発行

昭和9年11月、清浦圭吾や徳富蘇峰の勧めで月刊「東火」の発行を始めます。政治、経済面のほか文化面でも充実を図ります。

昭和11年(1936年)7月15日発行の『東火』を見ると、蘆花の10周年忌にあたって愛子夫人を熊本に迎え、「蘆花翁を語る会」を開催し、その記事を一面に掲載しています。そしてコラムには熊本英学校時代の蘆花が「吾輩は狂人である」と語ったエピソードなどを生き生きと伝えています。

また終戦の年の12月には新聞『西海時論』の発行を始めます。敗戦の混乱の中での発行に際し、「(前略)新日本国家の為に、新日本建設の為に、進んで難局に当たらんとする先憂の士とともに相携

えて本紙を培養し、本紙を成長せしめんとするものである」と意気込みを述べています。『西海時論』は月2回の発行から昭和28年は月2回の発行から昭和28年にも旬刊紙となり、天草版や人吉版なども発行されました。発行は昭和34年まで続きました。

◆郷土史家としての貢献

是山は、昭和10年(1935年)に県教育会が設けた肥後文教研究所の所員として任用されます。主任は郷土史家・平野流香でした。

ここでは是山は郷土史研究の新史料を提供していきます。後に流香の後任として主任となりますが、時局の進展により、研究所は縮小を余儀なくされてしまいます。

また、昭和12年、熊本城跡保存会(現在の一般財団法人熊本城顕彰会)が西南戦争60周年事業として城内に谷干城像建立の計画をしますが、その際も銅像の制作者である彫刻家・朝倉文夫との仲介に尽力しています。更に昭和15年から同19年まで同保存会の会誌『熊本城』の編集にも携わり熊



是山も建立に尽力した谷干城像。現在は熊本城内から高橋公園に移設されている。

本城の保存にも取り組みます。

一方、このころからラジオ出演も多くなり、昭和13年には「西遊の頼山陽」、戦後も「郷土と文芸」、「新聞の今昔」「中学時代の牧水」など幅広いテーマで出演し、文化向上、発展に尽くします。

◆熊本県近代文化功労者と熊日社会賞の受賞

熊本県教育委員会は、昭和23年度から広く近代文化の発展に貢献し、その功績が顕著だった者を「熊本県近代文化功労者」として顕彰する制度を設けました。その第1回は、横井小楠、北里柴三郎などですが、是山はその3年後、昭和26年度第4回に顕彰されました。65歳の時です。

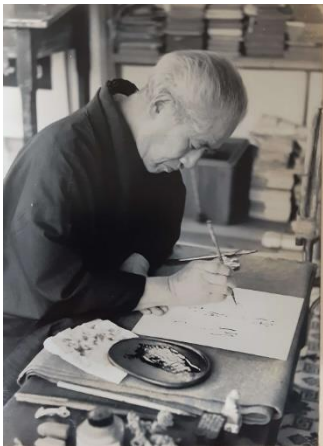
その後昭和31年には熊日社会賞（現在の熊日賞）も受賞し、それまでの功績が顕彰されています。

◆「熊本市政70年史」や「熊本県史」などの編纂に取り組む

是山は、晩年になると市史や県史等の監修や執筆に取り組みます。

昭和34年（1959年）の市政施行70周年を記念した『熊本市政70年史』（昭和39年に刊行）は、熊本県文化財専門委員でもあった是山にその著述が依頼されたものです。熊本市政のリアルな変遷を知る一冊となっています。

また『熊本県史』が昭和33年から10年をかけ編纂されますが、荒木精之らとともに監修を行い、通史編の「文化」の項では是山自身も執筆しています。是山はその中で、熊本の文学では小泉八雲や夏目漱石の影響は大きく、特に漱石は熊本俳壇に刺激を与えたことは極めて大きかったと評価を行っています。また同じ頃『熊本県議会史』の編纂にも携わっています。是山、70歳代の頃です。



色紙に揮毫する是山。（淡成居にて）

◆文人墨客としての生涯

『かはがらし』から『東火』へ

是山の「文人墨客」としての素養は、父満太郎から漢学を学び始めたことから始まります。その深い教養の中で、古人の詩文を楽しみ、自らも書画を認め、歌や俳句を詠み、文人墨客としての生涯を深めていきます。

是山の中で、活動の大きな柱の一つとなったのが、俳句誌『かはがらし』の発行でしょう。これは昭和2年に俳人・末次青雉（すえつくせいち）らとともに創刊したもので、のちの俳誌『東火』（月刊新聞『東火』ではない。）となって、

昭和56年（1981年）、是山が95歳まで発行が続けられました。九日を退社するまでは、新聞社の仕事で忙しく青雉らに任せていたようですが、その後は同人らとともに積極的に吟行にも出かけ、県内外での俳句指導や講演を行っていききました。俳誌『東火』の同人は、九州各県から本州にも及び、500人にものぼりました。

◆熊本市名誉市民となる

是山は、昭和45年（1970年）に県文化協会設立にあたり顧問に推され、熊本県立美術館の収集委員や熊本博物館協議会委員なども歴任しました。

そして昭和54年（1979年）、是山93歳の時に、俳人・中村汀女とともに、これまでの功績に対し「熊本市名誉市民」の称号が贈られます。

その後も活動が続けますが、昭和61年（1986年）6月4日、あと4日で100歳となろうとする日、腎不全のため99歳で亡くなりました。

「自分は単なる歌人ではない。また単なる俳人でも、単なる郷土史家でもない。どこまでも俗塵の中に生きつつ世を嘆く一老記者でありたい」と自らを語り、それを貫く人生でした。

（参考文献）

後藤是山遺文「そのころ」 後藤狷士編
是山小話 後藤狷士編
枯木山脈 橋元俊樹著
後藤祐太郎 古川重人著
熊本市史 第7巻・第8巻 熊本市
熊本市大百科事典 熊本日日新聞社

後藤是山記念館へ

行こう！

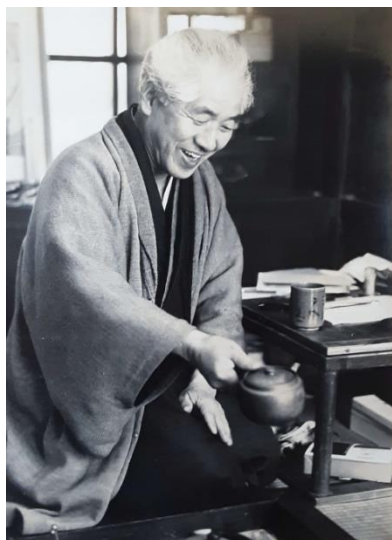
茶の間に切られた「囲炉裏」

後藤是山記念館の敷地には是山の暮らした旧居『淡成居』が残っています。庭の木々に囲まれたこの旧居は、静寂な中、今でも是山が暮らしているような、そんな空気が伝わって来ます。今回は、茶の間の「囲炉裏」を紹介します。

玄関から『淡成居』に入るとすぐ左に台所へと続く3畳の茶の間があります。ここには半畳

にも満たない小さな「囲炉裏」が切っており、その上に卓が置いてあります。

是山は炬燵を使わず、この「囲炉裏」を使って暖を取っていました。夏でも火は絶やしたことがなく、ここでお茶を飲み、訪れた人たちとも談笑し過ごしたそうです。次男の後藤狷士氏によれば、そんな姿こそ是山



玄関から入ってすぐ左の「茶の間」。囲炉裏の湯でお茶を入れ、談笑する是山。

をもっとも髣髴させる光景だったと言います。

是山は、訪ねて来る人が初対面でも滅多に拒むことはなく、話好きで聞き上手、どんな人の話でも好奇心と感動をもって聞いていました。

こんな話にも是山の人柄がしのべれます。この「囲炉裏」では山を囲んでいろんな人たちの談笑する姿が見えてきそうです。

(参考文献)
是山小話 後藤狷士編

熊本市記念館探訪

夏目漱石内坪井旧居（中央区内坪井町4-22）

是山らの主宰した「かはがらし」は、漱石の五高教授時代の俳句結社「紫溟吟社」の流れを汲んでいます。

そういう関係もあって、是山は松岡 譲氏（漱石の長女・筆子の夫）との交流も深くなり、昭和3年（漱石13回忌の年）に鏡子夫人と松岡氏が来熊した際、『草枕』ゆかりの地や漱石夫妻が住んだ旧居の案内を依頼されます。

そのとき内坪井旧居に寄った際、是山はよほどうれしかったのでしょう。筆子の産湯に使った井戸のところでは筆子が生まれた時の漱石の句を思い出し、「海鼠の如きは少々恐れ入る。ここは産湯の水の井戸だ、七五三縄（しめなわ）でも張ったらどうです（『ああ漱石山房』松岡 譲著）」と、是山が珍しく冗談を言ったそうです。夏目漱石内坪井旧居にも楽しいエピソードがたくさんありますね。

（夏目漱石内坪井旧居 096-325-9127）



第2号 熊本市後藤是山記念館だより 淡成居

発行日 令和6年(2024年)9月8日

編集・発行 熊本市後藤是山記念館長 植木英貴
(熊本市文化財課所管)

〒860-0950
熊本市中央区水前寺2丁目6-10
電話・ファックス
096-382-4061

開館時間
午前9時30分～午後4時30分
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12/29～1/3)
入館料 大人 200円
小人 100円

